



KAGAWA HISTORICAL ARCHITECTURE COMMITTEE

vol.01





香川県内で
現在行われている
歴史的建造物
保存修復（修理）
工事の現場からの
リレー・レポート。

保存 修理の 現場から

■ 第1回

善通寺誕生院太鼓塀の美装化事業① 松原 潔

善通寺（ぜんつうじ）は香川県西部・丸亀平野の南西に位置する真言宗寺院で、弘法大師空海（こうぼうだいしゅうかい）（774-835）の誕生地として知られ、平安時代・807年の創建と伝わる。また、四国八十八ヶ所霊場の第75番札所として多くの遍路巡礼者が訪れる。

境内西側の誕生院（たんじょういん）は、空海が誕生した佐伯家の邸宅跡に鎌倉時代に創建された子院（しいん）（塔頭寺院）で、江戸時代以降は善通寺全体を監督・統括するようになった。その正門にあたる仁王門南側の番所から途中に勅使門（ちよくしもん）を挟んで延びるのが善通寺誕生院太鼓塀で、遍路巡礼者が最初に対面する境内地に位置し、善通寺を代表する景観の構成要素でもある。



北東から望む善通寺誕生院太鼓塀

勅使門とともに、京都の伸和建設（株）により昭和11年（1936）に建設された。※黄土色の壁面には5本の定規筋（じょうぎすじ）が引かれているが、現時は風雨などによる経年劣化や雨落ちの跳ね返りによって漆喰・定規筋が剥がれ、一部は木舞が露出している。また、柱の脚元や地貫・垂木には腐朽箇所がみられ、瓦の多くも経年劣化が著しく、一部の瓦には割れやズレがある。

今回の修理工事は、平成30年度（2018）の国の補助事業である「美しい日本探訪のための文化財建造物魅力向上促進事業（登録有形文化財建造物の美装化事業）」からの助成を受けて行われるもので、木部の腐朽箇所は継木や取り替えをおこない、塀の表面は中塗りまでを掻き落として漆喰および定規筋を復旧するものである。助成は、土塀の漆喰や屋根瓦などの修理工事費の50％が補助対象で、木工事や下塗り・中塗りは事業者負担となる。国からの補助金の総額は7,382,000円である（交付決定は平成30年6月1日）。

美しい日本探訪のための文化財建造物魅力向上促進事業は、「観光資源の魅力向上に資する観点から、重要文化財の壁や屋根などの外観及び公開範囲の仕上げに関わる部分を、健全で美しい状態に回復する事業を支援すること」を目的として平成29年度（2017）から開始された。詳しくは、文化庁HP（<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/hojo/hojokin.html>）を参照されたい。なお、修理工事は令和元年（2019）6月中旬より開始され、令和2年2月末に完了する予定である。

※国有有形文化財登録時の資料に拠る



北西から望む善通寺誕生院太鼓塀



勅使門北側北面現状



現状調査の様子

文化財名：国登録有形文化財（建造物）
善通寺誕生院 太鼓塀、木造平屋
切妻本瓦葺、土塀箱塀、
総長さ60.95m
高さ2.74m・2.31m
建設年代：昭和11年（1936）※
事業者：宗教法人善通寺
施工者：藤木工務店
設計監理：（有）夢和詩生（ゆめしせい）
伝統建築研究所
技術指導：岡山理科大学教授
江面（えづら）嗣人

保存活用に進む前に

玉井幸絵



豊嶋家の外観



土間

第1回 豊嶋家（維持活動）からみえてくる、宇多津の都市（まち）の姿



豊嶋家とは、江戸寛永18年～寛政3年頃(1641-1791)に宇多津の庄屋をつとめた。宇多津村では最も長く庄屋をつとめた家であり、明治8年(1875)に材木商となった宇多津を代表する大商家である。この豊嶋家に関連する町家が、宇多津町古街(旧市街地の愛称)の隅に残る。西光寺より南、浦町の一角に位置し、広大な間口を持ち街路に面して主屋が建つ。

外観は古風で本瓦葺・平入り。切り妻側はシンプル、平入り側は立ちの低い二階で、軒の出が短いold style。築年は定かではないが19世紀前半と推測されている。本家・新家の間には板塀が施され、町並みに連続性を与えている。内部は増改築がなされているが、通りにニワと大正期のものと推定する台所・おくどさんが残る。町家の形式を残しながら、時代の変遷が刻まれた建物であるといえる。豊嶋家の由来は、守護細川氏の被官(大名直属の武士)として三野郡に勢力をもった小領主で、慶長2年(1597)には、豊嶋孫太夫が生駒一正から三野郡勝間村内に三十六石余りの知行を認められた。その後、生駒家の改易により宇多津に移住したとされる。庄屋に加えて、宇多津に設置されていた松平藩米蔵の番役も代々つとめていた。

以上、豊嶋家のルーツは古文書(豊嶋家文書)に記されている。また、大正10年(1921)に描かれた敷地図には庭の奥に大規模な座敷棟が描かれ、この頃には敷地背面が鴨田川(大東川の支流)に面しており、材木の搬出入は川を利用していたことが推測されている。豊嶋家に残されたものは、この町家と古文書のみ。宇多津の歴史上で重要な役目を担っていたことまでは何となくわかるが、実際の建築、町家に足を踏み入れ何が

できるのか。近隣に住む者として「とても大きな町家」「なくなると寂しい」というシンプルな想いからスタートした活動をどこまで漕いでゆくことができるのか。活動の過程を綴っていきたい。

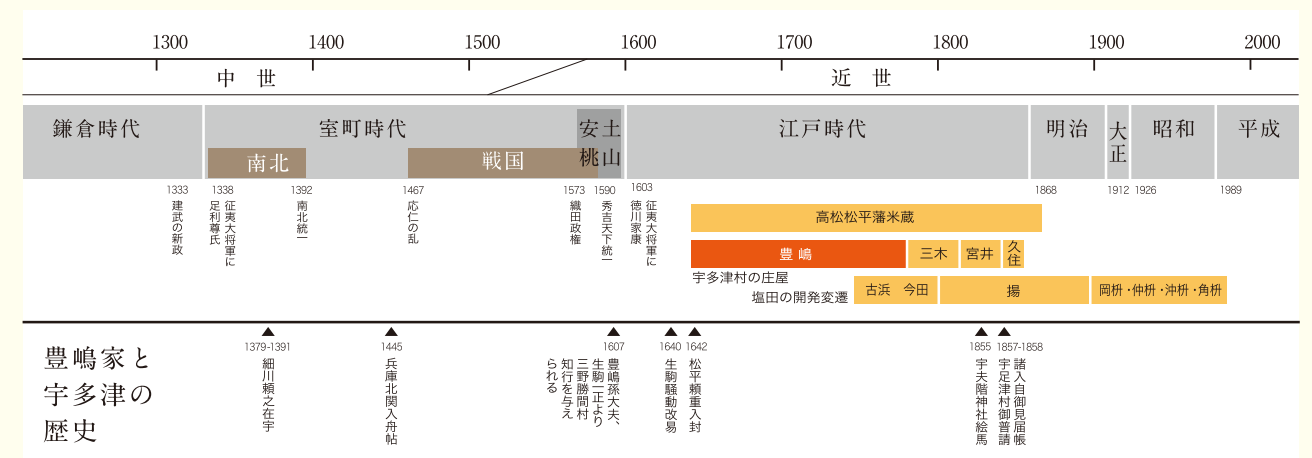


ボランティアによる片付け作業

補足

豊嶋家は空き家になり、長年の雨漏りで主屋裏側は屋根が落ち、壁が抜けている状態である。応急処置も手をこまねていて、台風がくればいつもヒヤヒヤする。この連載は、建物がいつまで残っているか、資金ナシ、よそのもの(人の手のもの)、手に負えなさそうな事態を前に、ナイ知恵を絞りながらノロノロと進む活動記である。

※次回第2回は、活動スタートから、建物調査前まで(中世の仏像がでてきたこと、聞き取り結果まで)を報告する。



参考文献／『宇多津の歴史的建造物と景観—宇多津町歴史的景観活用保存計画策定事業報告書』(宇多津町教育委員会 平成17年3月)『続 宇多津町誌』(宇多津町 平成22年)

●コラム
古民家を
思う

第1回

古民家らしさとモジュール

高橋 史



古民家を懐かしいと思う。
住んだこともないのになぜか懐かしい。
懐かしさのより所(根拠)はどこに
あるのだろうか。

このコラムの目的は香川県内に残る古民家を訪ねて、
そのより所としての共通項を見出し、古民家の価値を再評価することである。
その家に息づく暮らしや住まい方の工夫にも触れていきたい。



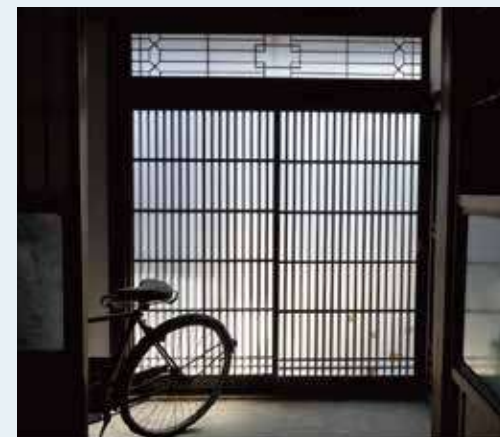
中庭を囲む渡り廊下

コラム内の古民家は
「近代の庶民住宅」と定義する。

庶民住宅とは、室町時代～江戸末期に
確立された被支配階級(庶民)の住宅のこと。
明治時代以降に建てられても
この民家様式に従っている住宅は
庶民住宅とする。

大正末期から昭和初期に建てられたT家は高松市栗林町に
ひっそりと佇んでいる。当時は隣近所にも同じような家が並
んでいたそうだが、すっかり建て替わってしまい、この家の前
だけがまるで時が止まったようだ。

T家はこの時代の典型的な庶民住宅である。1階には玄関、
6畳の居間と隣には4畳半の茶の間、台所、風呂、トイレ、そ
して中庭を挟んで離れのような4畳半と4畳の部屋がある。
2階には客間として設えられた8畳の座敷と次の間の2部屋
を配していた。



玄関



ルイスポールセンのライト

※1尺=303mm 1寸=30.3mm

※内法(うちのり): 横方向は、壁の内側から壁の内側までの
寸法。縦方向の場合は床から天井、または鴨居までの内
法高を指す。

※モジュール(module): 建築物で、各部分を一定の大きさ
の倍数で統一するとき、その基準となる大きさ。日本建築
における畳の寸法など。

建設年代: 大正末期～昭和初期
建築面積: 不明
所在地: 香川県高松市栗林町
構造: 木造2階建
見学: 不可

庶民住宅の水準が向上したのは明治後期。室町時
代から徐々に確立してきた庶民住宅の規格は江戸
時代中期にほぼ完成した。それは材木の寸法であ
り、畳の寸法であり、建具の寸法である。庶民住宅
はそうやって共通言語を持つことで、効率的に家を
建ててきたのである。

明治になると裕福な庶民―商人などが現れ、住宅に
支配階級への憧れを取り込むようになってきた。それ
は材料や造作で表現されていく。T家にも庶民住宅
の原型といえる部屋と、憧れの象徴である座敷、そし
てその中間の居間が混在している。

「この部屋はこの家の【ケ】の場所。ここが一番落ち
着く。」T氏がそういった部屋は飾り気のない4畳半
の間。昔は隠居部屋のようなだったが、今は隣の4畳
の部屋と合わせて事務所として使っている。四方の
うち一方は白い漆喰の壁。二方の開口部には、奥様
が古道具屋で購入してきたという簀戸(すど)がぴっ
たりとはまっていた。

この家が庶民住宅である決定的な所以は「モジュ
ール」であるとT氏は語ってくれた。香川県の畳は通常、
京間が採用されていて、サイズは3尺1寸5分(910
mm)×6尺3寸(1910mm)。つまり4畳半の部屋の1辺
の内法は9尺4寸5分(2820mm)になる。そして床
から鴨居までの高さは5尺7寸(1725mm)。この横方
向の寸法と縦方向の寸法の比率が庶民住宅の要な
のである。黄金比ともいえるこの空間感覚が崩れて
しまうと、本来の庶民住宅からすっかり遠ざかって
しまうのだという。この「モジュール」が懐かしさの
より所の一つであることを教わった。

ただそんな難しいことを抜きにしても、このシンプ
ルな部屋になじんでいるルイスポールセンのライト、
センスよく掛けられた額や民芸品に、古民家(庶民住
宅)の懐の深さを心地よく感じながら、自分もこんな
家に住んでみたいと思うのであった。

讃岐農家の屋根

戸塚元雄



香川に残る古い農家には金属板で覆われた草葺寄棟屋根の周囲に瓦の庇を回したものが多い。讃岐ではこれを「四方蓋造」と呼ぶが「鍔葺(しころぶき)」の方が一般的だろう。鍔とは兜の後ろに垂らした布状の防具のことで、二段になった屋根の姿が鍔のついた兜に似ていることから名付けられた。昨年、県立ミュージアムが東讃2市を対象に行った調査によると、草葺農家と思われる建物がまだ800棟近く現存するらしい。おそらくその多くは瓦庇付だと思う。同じような屋根は香川県に限らず瀬戸内沿岸をはじめ西日本一帯に見ることが出来る。



四方蓋造農家 出典「四国の民家」写真：上野時生

また、別なタイプの屋根もある。江戸中期頃に建てられた細川家住宅(長尾町)や恵利家住宅(大川町)、山下

家住宅(四国村)などは同じ草葺寄棟造でも周囲に瓦庇がない。これを讃岐では「つくだれ葺」と呼ぶようだが語源はよく分らない。



細川家住宅・江戸中期/重要文化財



同 室内

細川家住宅の内部は土間、土座、床座の三つに分かれている。土座とは土間を少し掘り下げ、周囲に木枠を廻した中に粃殻を敷き詰め、上に藁を敷いたもので、囲炉裏があることから、そこが食事の場であることが分かる。土座から1尺ほど高い床座は寝室で、竹を並べた床の上に藁を敷いている。細く曲がった柱と梁、竹・茅・藁・土など、使われている材料はどれも農家が容易に入手・加工できるものばかりである。分厚い土壁に囲まれた外観は開口部が少なく、どこを見ても当時の農民の厳しい暮らし振りが窺える。

一方、瓦庇を廻した住宅の外観は現代の住居とあまり変わらないように見える。建設当初の様子を推測すると、室内は土間と床座に分かれ、床座の奥には書院造の畳敷であったのではないかなと思う。こうした建て

方は名主層など有力農家にはじまり、その後一般農家にも広がった。しかし名主層と云えども当初は細川家住宅と同じような家に住んでいた筈で、それは草葺寄棟屋根を残していることから明らかである。ではなぜ、またいつ頃、屋根の形が変わったのか。最近ようやくこの疑問に答えてくれそうな本に出会うことが出来た。



藤田元春著「日本民家史」は大正期のフィールドワークを基に書かれたもので、昭和2年に出版された。ちなみに藤田さんは建築史家ではなく人文地理学者である。幸い当時はまだ近世以来の民家が沢山残り、民俗学者や建築家による現地調査も始まっていた。調査に参加した今和次郎は大正11年、民家研究の草分けとなる「日本の民家・田園生活者の住家」を出版した。藤田さんも著書の中でこの本に触れている。

今和次郎氏が、「日本の民家」に於て、「現今我国に見る農家の間取の骨組は全国を通じて大体一様であるといっている」と述べ、農家の間取は土間と床張りの部屋との部分から出来ているが、床を張ってある部分は十字形の間仕切で、四つの部屋になったものが最も普通である、と記述された。これは誠に要点を掴んだ卓見である。

農家の平面は古くは土間の一室空間に始まり、やがてそれが土間と土座に二分され、時代が下るにつれて床座が拡大・分化する過程を辿ってきた。その結果、全国に散在する近世農家の間取には明らかに共通性が認められる。今和次郎は主に東日本の、藤田元春は近畿・北陸など西日本の調査により同じ結

論に達したようだ。以下、「日本民家史」に沿って話を進める。

大正十五年十月、四国阿波に旅行して、蔵本駅のつぎ府中という粟※の国の古い政庁のあった付近の村落に、この四阿※の方形草葺の多いのを発見してうれしく感じたことであった。新しいのは周囲に瓦庇をつけているが、古いのは瓦庇がない。四間二面で内部は八畳敷の四間取になった民家が多いと見た。

※徳島は粟の産地であったため粟国とも呼ばれていた。
※阿とは棟のこと。四阿は寄棟や方形など四方に葺き下ろした屋根。四注ともいう。

短い文章だが後半に二つのポイントがある。一つは四国の農家に瓦庇が現れたのは江戸末期から明治の頃らしいこと、もう一つはその平面である。四間二面、方形草葺屋根ということから、こうした家が格別大きくはない普通の農家で、八畳敷の部屋を持っていたことが分かる。それが屋根の変化の理由を知るためになぜ重要なのか。話は江戸初期に遡る。

江戸幕府は武家を頂点とした支配制度を徹底するため、寛永の町村諸法度以後、度々通達(御触書)を出して庶民の生活に縛りをかけた。こうしたお触れは藩を通じて国中の町村に伝えられ、その中で家作りも様々な制限を受けた。造作では書院造に欠かせない長押が禁じられたが、特に重要と思われるのは梁間を二間半乃至三間以下※に抑えられたことであった。平入四ツ間造の場合、梁間三間では六畳二間が標準になる。八畳間をつくらうとすると残りは四畳になり居室として使うには物足りない。

※「享保六年丑八月七十五箇條御法度書 一、長押作之義有来候者差置き、建直し候節長押作無用に候、其外新規に建候家は梁間可限三間候、(以下略)」

江戸幕府開設から100年。平和な時代が続き庶民の生活水準も上がってくると、こうした規制を破る動きが現れても不思議ではない。当時の様子をリアルに伝える古文書が残っていた。これを読むと三十年前には細川家住宅のような家に住んでいた人々が書院造を真似た家を建てるようになったことに武家が神経を尖らせていた様子が分かる。

享保十四年巳酉年三月御条目 一、村里の居宅三十年以前は大概土間に居ねござ庭用之由、当時の風板敷・天井・畳・腰障子を用のみならず、或帳付・式台・くれ縁・庭のかかり、偏に武家の様態、其分限をわするの甚だしき、畢竟未進諸役の滞る根本にして、此等の風体不可然之第一たり。(略)新造の家梁間二間半庇一間、桁行六間に過ぐべからず。(以下略)

こうした通達は度々出されたようだが、それでもいったん起きてしまった動きを止めることは出来なかった。藤田さんは草茸寄棟鉋茸が生まれた経緯を次のように説明している。

享保以後世は増々太平になってきて寛永、寛文の昔の法令をその儘に押しつけることは六ヶ敷なつた。しかも幕府は時々思ひ出したやうに、儉約令を出してこの制限の実行をはかったものである。そこで人民も三間梁よりも大きい家をこしらへる際には、瓦ぶぎの場合など屋根の中程に唐草瓦を一行に置いて、それから先は庇だと云ひぬけるとか、草葺ならば、しころをふきかへて、ここからは庇だといふことにして徐々に検査の眼をぬける工夫をしたのである。

この変化は農家が武家に倣い書院造の座敷を取り入れる時期に起きたようだ。庇が必要になったのは三間梁の制約の下で八畳の座敷を作ろうとしたからだろう。庇は言わばグレーゾーンであった。それを利用して梁間三間の前後に半間の庇を設ければ奥行きは四間になり八畳座敷が取れる。一間庇にすれば縁側も可能になる。平面拡大は外観にも影響を与えた。細川家住宅に見る如く、かつての農家は周囲を分厚い土壁で囲い、棟から軒先まで急勾配の合掌小屋を組み、草屋根を葺き下ろしていた。それは土壁を雨から守るには大

いに役立ったが、奥の間が畳座敷になり開口部が拡がると低い軒先が邪魔になり室内も暗くなる(細川家住宅の軒先は内法高よりも5寸程低い)。農家のシンボルである草葺屋根を守りながら室内に多くの光を入れようとすれば軒先の勾配を緩くしなければならない。こうして周囲に瓦庇を回した草葺屋根は規制を潜り抜けながらなし崩しに広がったと思われる。



細川家住宅内部 床座から外部を見る。

規制が消えた明治以後もこの形が続いたのは、草葺屋根と瓦庇の組み合わせに合理性と美しさを感じたからだろう。藤田さんは車窓から眺めた大正期の瀬戸内田園風景をこう書き記している。

「即ちこの瀬戸内沿岸の中心部では、其海岸たると平野たるとを問わず、民家は四阿の平入ならざるはない。中には勿論新しい瓦葺の入母屋もあれば切妻もあるが、一般の形式としてはこの沿道すべてが、矩形のベースの上に立つ四阿の草葺で、棟丈は瓦の箱棟造で、軒まわりの四方しころも亦瓦ぶきにすから、中央部のみが茅であって、遠目に美しいのが多い。」

その後、年々茅の入手は難しくなり、葺き手の数も減って草屋根の維持は難しくなった。今日、僅かに残る草葺屋根は金属板やスレートで覆われている。この現象は既に大正期に起きていたようで、藤田さんは著書の中で嘆いていた。しかし、そのために昔日の屋根の形を残せたと思えば、これもまた良しとすべきかも知れない。



香川歴史的
建造物保存活用会議
通信 vol.01

発行：香川歴史的建造物保存活用会議
発行日：2020年5月25日
住所：〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27
電話：0877-85-5126 FAX:0877-85-5127
URL：<http://kagawa-historical-archi.org>
mail：info@ksgawa-historical-archi.org
編集会議メンバー（50音順）
大西泰弘、高橋史、玉井幸絵、松原潔、森本英樹

善通寺誕生院太鼓塀の美装化事業① —— 1-2

松原 潔 まつばら きよし

日本の仏像、特に運慶の作品にひかれ美術史を学ぶ。仏像だけでなく、その安置空間や建築にも関心がある。平等院鳳凰堂、浄土寺浄土堂、東欧・北欧の木造教会も好き。

豊嶋家からみえてくる、宇多津の都市の姿 3-4

玉井幸絵 たまい ゆきえ

広島県北での修景活動灰塚アースワークプロジェクトに参画、コミュニティと景観に関心を持つ。現在、宇多津在住。まち歩きをはじめ、町家の維持や空き地での菜園も展開中。

古民家らしさとモジュール ————— 5-6

高橋 史 たかはし ふみ

大学で地域づくりを専攻し、香川県内の観光まちづくりに10年ほど携わる。明治～昭和初期の近代建築めぐりが趣味。現在、ウェブ制作会社で取材・ライティングを担当している。

讃岐農家の屋根 ————— 7-9

戸塚元雄 とつか もとお

国産杉材による住宅設計者。住宅のスタンダードへの視点から近世・近代の住宅史、1950年代の小住宅などに関心を持つ。

発行にあたって ————— 10

大西泰弘 おおにし やすひろ

住宅、都市デザイン、景観、ランドスケープデザイン、地域計画など住環境の分野を中心に、丸亀城下町や住宅のつくり方など地域課題に長くかかわっている。

発刊に
あたって

大西泰弘

2001年に兵庫県から始まり全国に広がったヘリテージマネージャー養成講座に倣い、2016年と2017年度の2回、香川県でも歴史的建造物保存活用にかかわる技術者の養成講座を開催しました。

翌年の2018年6月、講座を受講修了したメンバーが集まり、香川県内の歴史的建造物の保存活用を進める団体として本会を設立しました。

設立から2年が経ち、地域からの相談、セミナー開催や他県の団体との交流など経験し、これからの活動に必要なものが見え始めたところです。

歴史的建造物は、地域の歴史や場所の記憶を受け継ぐものとして、これからの地方都市に求められる地域らしさや地域活力を生み出す資源として注目されています。また近年には、その時間的価値や経済効果が評価され、新たな都市活動を生み出すストックとしても見直されつつあります。

地域の風景に馴染んでいるもの、その場所らしさにとって大切なものなど、指定や登録されていなくても長い時間を経た建物は歴史的建造物であり、私たちの身近なところに多く存在します。

この機関紙は、このような身近にある歴史的建造物の価値を評価し紹介していきたいというメンバーの意見から始まりました。

普段見慣れているものを評価することから、私たちの廻りの身近な風景が豊かになることを期待しています。

本紙では、地域に残る民家などを中心に会員が関わる地域の歴史的建造物などの情報を紹介していきたいと考えています。

この度、会のロゴマークができがありました。ロゴマークは会の活動を表す PLAY(再生し暮らしに生かす)、STOP(建造物を知り・考える)、OUTPUT(情報を地域に広げる)、INPUT(学び、仲間を増やす)の4つを記号を組み合わせたものです。

本紙は、情報を地域に広げる(OUTPUT)活動の一つですが、ここに寄せられるご意見などの情報をこれからの活動に生かすものでもあります。皆さんからのご感想やご意見、お待ちしております。

設立から現在までの活動

<2018年度>

- 2018.06.28 設立総会 ①
- 07.14 ヘリテージマネージャー大会 in 淡路 / 南あわじ市(参加)②③
- 08.10 登録有形文化財建造物修理関係者等講習会 / 気仙沼市(参加)④
- 10.25 ヘリテージマネージャーネットワーク大会 / さいたま市(参加)
- 11.28 垂水神社調査 / 丸亀市(主催)⑤⑥
- 12.22 綾坤山常教院正蓮寺報告会 / 坂出市(共催)⑦⑧
- 2019.02.05 志度寺実測調査演習 / さぬき市(主催)⑨
- 02.12 土塀調査 / まんのう町(共催)

<2019年度>

- 2019.04.25 2019年度総会
- 05~2020.02 肥土山の舞台修繕に関する調査 / 土庄町(委託)⑩
- 07.06 ヘリテージマネージャー大会 in 網干 / 姫路市(参加)⑪⑫
- 07.13 第1回 正蓮寺歴史文化講座 / 坂出市(後援)⑬
- 08.30 松島町の民家調査 / 高松市(依頼)
- 09.28 第2回 正蓮寺歴史文化講座 / 坂出市(後援)
- 10~2020.02 有形文化財耐震予備診断 / 香川県内(委託)
- 10.05 白峰寺調査報告会 / 坂出市(協力)
- 10.06 八栗寺講習会 / 高松市(主催)
- 2020.02.12 古材文化の会交流会 / 京都市(共催)⑭⑮⑯
- 02.17 善通寺誕生院太鼓塀美装化事業報告会 / 善通寺市(共催)⑰
- 04.10 土塀修復ワークショップ準備 / まんのう町(共催)⑱⑲



香川歴史的建造物保存活用会議

ご相談・お問い合わせは

〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27 香川歴史的建造物保存活用会議 事務局
 TEL : 0877-85-5126
 FAX : 0877-85-5127
 mail : info@kagawa-historical-archi.org
 URL : <http://kagawa-historical-archi.org>



香川歴史的建造物保存活用会議ホームページQRコード